

映画をまちづくり再構築の契機に

鳥取県倉吉市を舞台にした映画『遥かな町へ』（原作・谷口ジロー氏、脚本・監督錦織良成氏）の撮影が快調に進む。国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建群）に選定され、赤瓦・白壁土蔵群に象徴されるレトロなまち並みが生きたオープンセットになり、「古き良き時代の昭和」が再現される様子は、活気あふれる往時の倉吉をほつつかつさせる。

まち全体がミュージアム

れならば映画を財産として生かし、改めて「倉吉らしさ」を前面に押し出すまちづくりに向かわない手はない。

かつて倉吉市は、原作漫画と江戸末期・昭和初期の建物が残るまち並みをリンクさせ、「遥かなまち倉吉創造プロジェクト」と銘打ったアクションプランを策定。「ほんものに出会えるまち」のキャッチフレーズを掲げて地域活性化策を進めた。2005年ごろに始まった取り組みは官民連携で転がり始め、単行本を片手に漫画に登場した景観や場所を巡る探訪ツアーは、大手旅行代理店の商品にも採用された。

同プロジェクトの中で、観光客らをまち巡りに誘引して「本物の地域資源」に触れてもらい、地元のビジネスチャンスにつなげようとした事業が「倉吉

レトロまちかど博物館」。最盛期は伝建群内の66店舗が参画。昭和の子どもがかぶっていた当時のプロ野球帽子、昭和30年代の帆布製学生かばん、手動式レジスター、蓄音機、1953年の倉吉市制発足を祝った法被、初代ウルトラマンのジャンボシンダーなど、枚挙にいとまがないほどの「本物」が店内や軒先に並んだ。

倉吉のまちづくりを再構築する機会を得たと言える。過去と同プロジェクトについて市経済観光部は「地域の誉れを創出し、住民が生き生きと楽しみながら暮らせる観光地づくりが狙いだ」と回想。その上で「映画は市民が倉吉を見つめ直す絶好の機会であり、誇りを持つことになる素材。それを大事にし、観光客に来てもらうだけでなく、地元で商売できる素地が生まれてくれれば」と意識を高める。

倉吉のまちの「しわ」

映画化に際して錦織監督は「倉吉でしか、つくれない映画。何十年、100年に一度のチャンスになる。映画によって観光客が増えるのは一時的なもので、それは二次的要素。一番の目的は地域住民の誇りを喚起すること」と力を込めた。「倉吉の誇り」を地域住民が再認識することは、人口減や高齢化が進む中において、まちづくりと若者定住化の「磁場」にもなり得る。そ

伝建群は住民生活、観光地、文化財が三位一体のエリア。まち全体を屋根のないミュージアム（展示空間）と位置付け、イメージに統一感を持たせることで、倉吉らしいレトロ感を際立たせる演出。それらは木彫りの七福神が印象的な「福の神に会える街」づくり、江戸時代の大坂の豪商・淀屋と縁深い「倉吉淀屋」の歴史とも連携して広がりを見せた。

映画『遥かな町へ』製作によって、

原作者の谷口氏は生前、「倉吉というまちが、私にこの作品（『遥かな町へ』）を描かせてくれた」と語った。人は年を取ると「しわ」が生まれる。それは人が生きてきた証し。倉吉のまちも同じで、住民・地域、歴史・文化が織りなしてきた「しわ」がある。むやみに流行を追いついて、無いものねだりの活性化ではなく「しわ」を大事に生かすまちづくり。それが持続性のある地方創生につながると信じる。